

平安京右京三条二坊十五町・三坊二町跡

2002年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安京右京三条二坊十五町・三坊二町跡

2002年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しております。また、平安京遷都以来今日に至るまで都市として永々と生活が営まれてきており、各時代の生活跡が連綿と重なり合っています。都であるゆえに、そこから発見されるその一つ一つは、日本の歴史を語るうえで欠くことのできないものとなっています。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした遺跡の発掘調査を通して京都の歴史の解明に取り組んでおります。その成果を市民の皆様幅広く公開し活用いただけるよう努めていくことが研究所の責務と考えております。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、出土遺物の小・中学校や公的施設での貸出展示、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところであります。

さて、当研究所では従来各年度毎で報告してまいりました「京都市埋蔵文化財調査概要」を改め、平成13年度調査分より各調査箇所毎に1冊の報告書として発刊しております。その第6冊目として、このたび地下鉄東西線西進に伴う駅舎建設に伴います平安京跡の発掘調査の成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援をたまわりました関係者各位に厚くお礼ならびに感謝を申し上げます次第です。

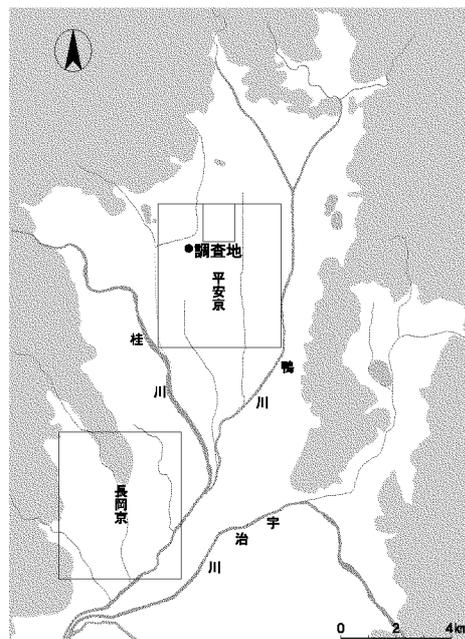
平成14年10月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 平安京右京三条二坊十五町、三坊二町跡
- 2 調査地点所在地 京都市中京区西ノ京東中合町・西中合町（御池通内）
- 3 委託者及び承諾者 京都市 代表者 京都市長 ~~林本義典~~
- 4 調査期間 2001年10月22日～2001年11月29日
- 5 調査面積 約162.5m²
- 6 調査担当職員 百瀬正恒・上村和直
- 7 使用地図 図3は、京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「山ノ内」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 日本測地系（改正前） 平面直角座標系（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用基準点 京都市が設置した京都市遺跡測量基準点（一級基準点）を使用した。
- 11 遺構番号 調査区ごとに通し番号を付し、遺構種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 土器類に通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 掲載写真 村井伸也・幸明綾子・百瀬正恒・上村和直
- 14 作成担当職員 百瀬正恒・上村和直
- 15 執筆分担 百瀬：1・2章、3章（2）、5章（3）～（5）
上村：3章（1）（3）、4章、5章（1）（2）

（調査地点図）



目 次

1 . 調査経過	1
2 . 調査地点の位置と環境	2
(1) 位置と環境	2
(2) 地形図からみた調査地点	2
(3) 周辺における調査成果	2
3 . 遺 構	5
(1) 1 区の層序と遺構	5
(2) 2 区の層序と遺構	5
(3) 3 区の層序と遺構	6
4 . 遺 物	8
(1) 遺物の概要	8
(2) 1 区の出土遺物	8
(3) 2 区の出土遺物	9
(4) 3 区の出土遺物	10
5 . ま と め	13
(1) 平安時代前期から中期	13
(2) 平安時代後期から鎌倉時代	14
(3) 室町時代	15
(4) 戦国時代末期	17
(5) 近代の景観、周辺地域の調査課題	19

図 版 目 次

図版 1	遺構	1 区遺構実測図 (1 : 100)
図版 2	遺構	2 区遺構実測図 (1 : 100)
図版 3	遺構	3 区遺構実測図 (1 : 100)
図版 4	遺構	1 1・2 区調査前全景 (東から) 2 3 区調査前全景 (西から)
図版 5	遺構	1 1 区全景 (東から) 平安時代前期・中期 2 1 区SK01南部 (東から) 平安時代前期

	3	1区SK32遺物出土状況(東から)平安時代前期
	4	1区SK32完掘後(北から)
図版6 遺構	1	2区第2-1面全景(東から)平安時代前期
	2	2区第2-2面全景(西から)平安時代前期
	3	2区第2-1面SD20(北から)平安時代前期
	4	2区第2-2面柱穴群(北から)平安時代前期
図版7 遺構	1	3区第1面全景(東から)近世
	2	3区第2面全景(東から)室町時代
	3	3区第3面全景(東から)平安時代前期
	4	3区第1面SD03南壁断面(北西から)近世
図版8 遺構	1	3区第3面SE08全景(東から)平安時代前期
	2	3区第3面SE08細部(北東から)
	3	3区第3面SE08完掘(南から)
	4	3区第3面SD07肩部の柱穴群(北東から)
	5	3区西壁断面(東から)
図版9 遺物	1	1区SK32出土土器
	2	2区SK21、3区SD07出土土器
図版10 遺物	1	3区SD07出土須恵器
	2	3区出土鎌倉時代から室町時代の土器

挿 図 目 次

図1	調査地位置図(1:25,000)	1
図2	調査地点の条坊	3
図3	調査地点と周辺の既調査地(1:5,000)	3
図4	三条坊門小路と3区の平安時代遺構(1:1,000)	6
図5	SE08実測図(1:40)	7
図6	1・2区出土土器実測図(1:4)	9
図7	3区SD07出土土器実測図(1:4)	11
図8	御土居の復元と既往の調査地点(1:7,000)	16

挿図写真目次

写真1	調査区の安全対策	1
写真2	西ノ京原町に現存する御土居（東南から）	18
写真3	西ノ京原町に現存する御土居（東から）	18

表目次

表1	周辺の既調査成果一覧表	4
表2	遺構概要表	5
表3	3区出土遺物の機種別破片数	10
表4	遺物概要表	12
表5	御土居関係調査一覧表	17

平安京右京三条二坊十五町・三坊二町跡

1. 調査経過

この調査は、二条駅から仮称天神川駅間に計画されている市営地下鉄東西線の西進に伴う駅舎建設予定地の事前調査として実施した。¹⁾ 調査地点は京都市中京区西中合町・東中合町の御池通内で、西大路通から春日通西までの間が対象地である。

調査箇所は3箇所、南北幅2.5mのトレンチを20～25mの規模で、中央分離帯の南側に設定した。西大路通の西側を1区、その西にある春日通の東側を2区、西側を3区とした。

調査の日程は、2001年10月22日から道路占有の準備をし、29日からトレンチの掘削を行った。年末の交通量増加に対処すべく、11月後半には東の1区から順次調査を終らせて道路占有を解き、3区は11月29日に終了した。

なお、対象地は幹線道路内で交通量も多いため、人や車に対する安全対策には留意した。まず、転落防止のためのバリケードを設置、夜間の照明、さらに作業中はガードマンを複数配し、通行人の誘導などを実施した。学童や学生、通勤者への安全対策も考慮した。



写真1 調査区の安全対策

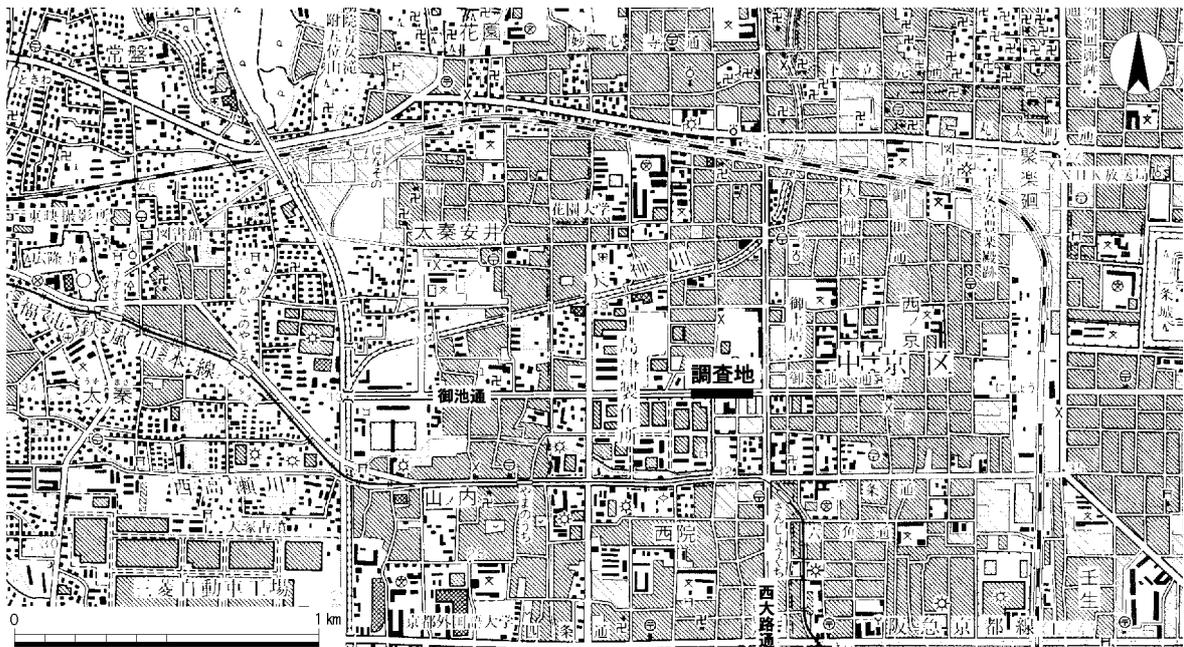


図1 調査地位置図(1:25,000) 国土地理院発行 1:25,000「京都西北部」を調製

2 . 調査地点の位置と環境

(1) 位置と環境

当地を平安京の条坊で示すと、1・2区が右京三条二坊十五町、3区が三条三坊二町となる。調査地は、その南端部と三条坊門小路道路路面に位置すると推定している。また、弥生時代から古墳時代の遺構・遺物を検出した西ノ京遺跡（京都市遺跡地図460）の北部に位置している。さらに、北東250mには昭和5年に史跡指定された御土居（京都市遺跡地図²⁾A454）が、西ノ京原町の住宅地に小山状に残る。

調査地に関係する直接的な文献史料はないが、付近の発掘調査では、平安時代から室町時代の遺構・遺物が多く発見されている。近世には西院村に近接する耕作地として存在した。

(2) 地形図からみた調査地点

明治28年に作成された仮製地形図や大正11年に近代の都市改造のために作成された都市計画図³⁾（図8）をみると、調査地点の周囲には条坊に由来する道路や水路が多数存在している。北から東西通の路線をみると、太子道・御池通・三条通・四条通など、南北通では土居西通・押小路通・春日通などがある。

また調査地に接して、現在は北側で斜行して西に流れる紙屋川は、西への斜行や南流を繰り返してきた。この川は、大正11年から改訂を重ねた都市計画図の昭和11年版には、朱色で現在の流路が描かれ、その付け替えが昭和初期に行われた。また、南には西高瀬川が三条通に近接して流れている。この河川は明治2・3年に京都府が掘削した運河で、西梅津から東の市中心部まで、都市交通や木材輸送のために整備された。西高瀬川は、二条城の城米輸送のために、近世後期の文政7年（1824）に計画され、下鳥羽から二条城までが整備された⁴⁾ことが知られている。

調査地点の地図をみると大正11年段階では、水田のマークがあるが、3区の北部には宅地や竹藪が描かれ、紙屋川に沿った自然堤防の景観が示されている。その後、当地では大規模な地形の改変、耕作地から住宅地への転換がなされ、その過程で西大路通など、道路が整備された。

豊臣秀吉によって天正19年（1591）に築かれた御土居は、調査地の東部に存在したが、近代の宅地開発で大半が削平された。しかし、破壊を免れた一部が史跡指定され、市五郎神社⁵⁾がランドマークとなっている。西側は神社の建設で旧状をとどめないが、頂部から東側は往時の土塁の状況をよく伝えている（写真2・3）。大正11年の都市計画図では、この部分に2軒の家が描かれ、現在の配置と変化がないことがわかる。

(3) 周辺における調査成果

これまで、調査地周辺では多くの発掘・試掘・立会調査が行われている（表1参照）。西大路通の東側では小規模な調査が多いが、西側は工場地帯のために大規模な調査が多い。

平安時代前期・中期 2区の調査地北側の西京商業高校内では数回の調査が行われ、十六町の11地点では、1町規模の平安時代前期の庭園をもつ邸宅、十五町北東部の10地点では、平安時代中期の野寺小路・押小路・建物、南半部の9地点では、溝・建物・井戸を検出した。2区南側の十四町北西部の8地点では平安時代前期から中期の三条坊門小路・建物・井戸などを発見した。2区・3区北側の二町東側で行った立会調査では道祖川を、3区南側の三町北西部の12地点では、平安時代中期の建物・井戸などを検出している。

平安時代後期 10地点で野寺小路川を、十六町では押小路の北側に沿う建物群が調査されており、三坊十二町などの軸が東に傾く建物を当該期のものとする、右京にも街路に沿う建物の存在が確認できる。

中世 三条二坊十六町では、室町時代の多量の遺物が耕作溝から出土している。建物や井戸などの遺構は存在しないので、遺物の性格を深められないが、完形の土器も出土することから、単なる耕作に伴う遺物とは考えにくく、簡易な構造の遺構が推定される。

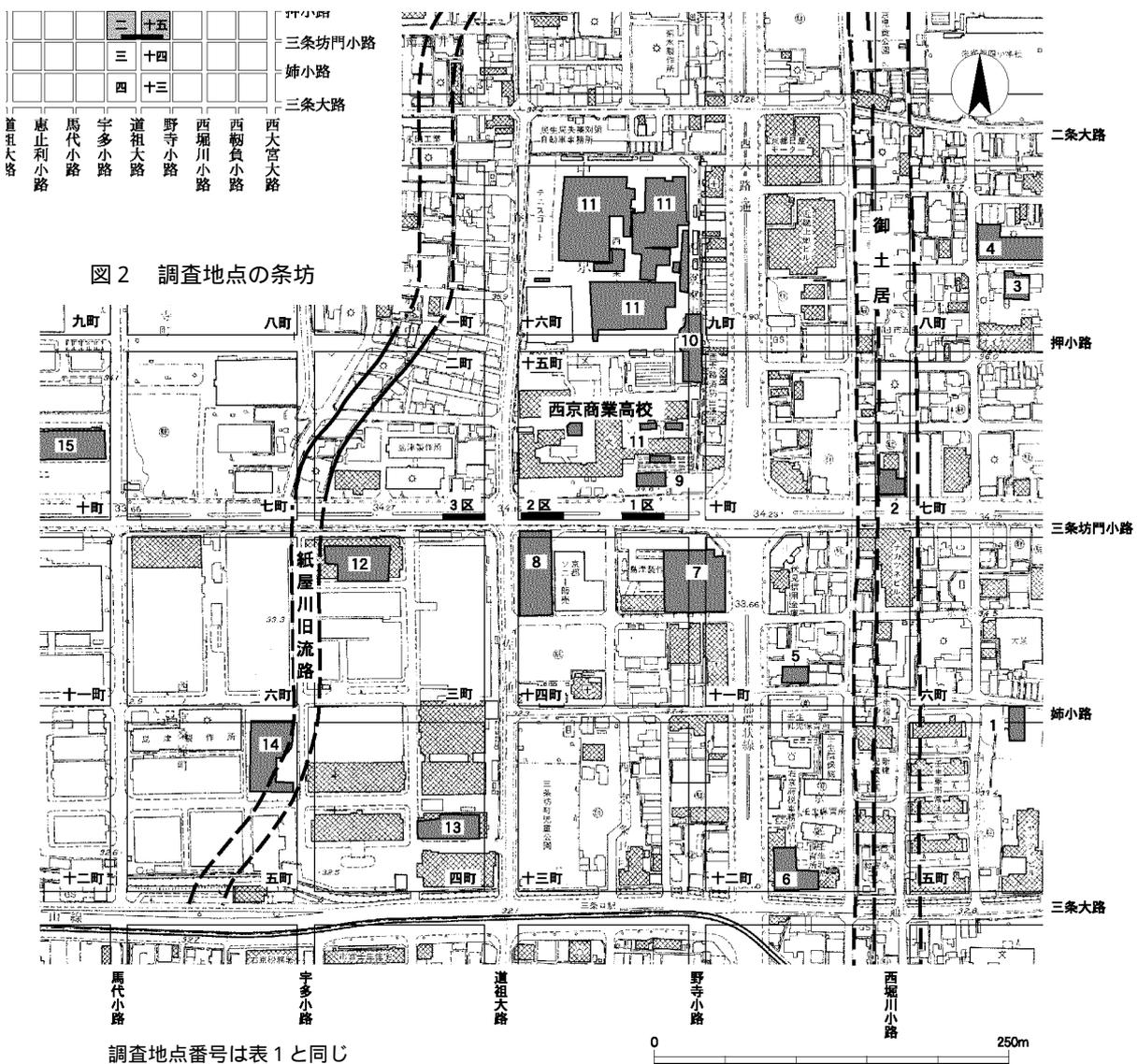


図3 調査地点と周辺の既調査地 (1 : 5,000)

今回の調査では、三条坊門小路の関連遺構とそれに面した宅地内の遺構を検出し、当地の町割り进行を明らかにすることを目的とし、またその後の変遷についての資料蓄積もめざして実施した。

表1 周辺の既調査成果一覧表

番号	調査条坊	略記号	所在地	調査期間	調査概要	文献
1	右京三条二坊五町姉小路	85HK-RE	中京区西ノ京北小路町4他	1985.10.21～1986.2.17	姉小路南側溝、平安時代の建物7棟、柵列4条、井戸1基、溝5条を検出。	昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要 本文46p
2	西堀川小路	82HK-RD	中京区西ノ京町64	1982.6.17～7.10	西堀川小路の堀川、路面2面、西側溝などを検出。	昭和57年度京都市埋蔵文化財調査概要 本文39p
3	八町	89HK-RP	中京区西ノ京町99	1990.3.15～5.11	4の調査に連続する園池一部、柱穴などを検出。	平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要 本文53p
4	八町	86HK-RI	中京区西ノ京原町97	1986.12.8～1987.3.23	平安時代の建物1棟、井戸2基、溝1条、園池の一部、川などを検出。	昭和61年度京都市埋蔵文化財調査概要 本文31p
5	十一町		中京区西ノ京下合町41	1993.11.15～12.10	平安時代の井戸、土壇、溝、柱穴など、近世の洪水層を検出。	平安京右京三条二坊十一町跡発掘調査終了報告書 古代文化調査会 1994年
6	十二町	78HK-CS	中京区西ノ京新建町5-14～5-30	1978.11.10～12.28	建物3棟、平安時代前期の井戸1基、平安時代以前の可能性のある溝などを検出。	平安京跡発掘調査概要 京都市埋蔵文化財研究所概要集1978 本文60p
7	十一・十四町野寺小路	89HK-CF008	中京区西ノ京下合町11	1989.11.30～1990.2.23	三条坊門小路南側溝、野寺小路東西両側溝、柵列2条、川跡を検出。	平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要 本文56p
8	十四町	97HK-CF009	中京区西ノ京下合町地内	1998.3.19～6.26	三条坊門小路南側溝、平安時代の建物8棟、門2棟、柵列8条、井戸3基と道祖大路川などを検出。	平成10年度京都市埋蔵文化財調査概要 本文62p
9	十五町	87HK-RA002	中京区西ノ京東中合町7 西京商業高等学校	1987.5.18～6.12	平安時代の溝4条、柱穴などを検出。他に中世の井戸を検出。	昭和62年度京都市埋蔵文化財調査概要 本文43p 第2次調査
10	十五・十六町野寺小路	81HK-RA001	中京区西ノ京東中合町7 西京商業高等学校	1981.7.3～7.31	押小路両側溝、建物1棟、井戸1基、野寺小路川などを検出。	昭和56年度京都市埋蔵文化財調査概要 本文39p 第1次調査
11	十五・十六町押小路	HK-RA003～005	中京区西ノ京東中合町7 西京商業高等学校	1999.7.21～2001.3.14	十六町では建物群と庭園・泉など、1町規模の邸宅を検出。	平安京右京三条二坊十五・十六町 京都市埋蔵文化財研究所調査報告第21冊
12	三条三坊三町	80HK-CF002	中京区西ノ京桑原町1	1980.4.10～7.15	平安時代の掘立柱建物5棟、柵列1条、井戸1基、溝などを検出。	平安京右京三条三坊 京都市埋蔵文化財研究所調査報告第10冊 1990年
13	四町	81HK-CF003	中京区西ノ京桑原町1	1981.8.6～10.5	平安時代の掘立柱建物1棟、門1基、溝、土壇などを検出。	〃
14	五町	85HK-CF005	中京区西ノ京桑原町1	1985.10.21～12.5	平安時代の掘立柱建物2棟、柵列1条、井戸1基、溝などを検出。	〃
15	十町	79HK-CF001	中京区西ノ京徳大寺町1	1979.5.31～8.31	平安時代の掘立柱建物9棟、柵列2条、溝などを検出。	〃

3. 遺 構

調査区が3地点に分かれているので、各地点ごとに記述する。

(1) 1区の層序と遺構

1区の基本土層を上層から示すと、1～3層は御池通のアスファルト路面・整地層などの現代層で、その下層には部分的に4層(10Y3/1オリーブ黒色砂泥層)と5層(2.5Y3/1黒褐色砂泥層)があり、最下層は6層(10YR6/6明黄褐色砂泥層、地山層)である。

5層上面を第1面として、平安時代中期および中世の遺構を同時に検出した。中・近世の遺物包含層・耕作土は存在しなかった。これらの遺構面と耕作土は、道路造成時に大きく削平を受けたものと考えられる。

中世の遺構 第1面で検出した中世の遺構は、柱穴・土壌などがあるが、数は少ない。

土壌は、調査区東部に集中する。規模は一辺1m前後で、楕円形や不定形である。調査区東部で検出した土壌SK21は、規模1.5×1.5m、深さ約0.5mで、埋土は10YR5/2灰黄褐色泥土で、平安時代の遺物を多く含むが、当該期のものとしては鎌倉時代後期の土師器が出土した。

平安時代前期・中期の遺構 第1面で検出した平安時代の遺構には、柱穴・土壌などがある。

柱穴は全域に散在するが、調査範囲が狭いため建物としてはまとまらなかった。柱穴は、掘形が一辺0.2～0.3mの方形か円形で、底部に礎石・根石を据えたものPit05・11・23・30などもある。

土壌は、調査区東部と西部に集中する。規模は一辺1m前後で、楕円形や不定形をしていた。調査区東部で検出した土壌SK32は、規模0.9×1.1m、深さ約0.4mで、埋土は10YR2/1黒色泥土で、平安時代前期の土師器・須恵器がややまとまって出土した。西部ではSK01を検出した。全容は不明であるが、L字状をして、規模は東西1m以上、南北は2m以上、深さは0.3m程度で浅く、底には凹凸がある。

(2) 2区の層序と遺構

2区の基本土層をY=-24,348m地点で代表させ上層から示すと、1～3層はアスファルト路面などの現代層、8層(5Y5/1灰色砂礫層)、4層(10Y3/2オリーブ黒色泥砂層：水田耕作土)、5層(10Y5/2オリーブ灰色泥砂層：水田床土)、6層(5Y3/1オリーブ黒色泥砂層)、7層(5Y5/2灰オリーブ色泥砂層と砂礫層)の地山層となる。

表2 遺構概要表

時 代	1 区	2 区	3 区
平安時代前期・中期	柱穴・土壌	溝・土壌・柱穴	溝・柱穴・井戸
中 世	柱穴・土壌		土壌・溝
近 世		溝	流路・溝・包含層

重機で東部は3層まで、西部では5層の中位まで掘削した後、これを第1面として遺構検出を行った。東部で近世前期の溝SD01を検出した。

第2面の遺構検出は、東部では5層の下面、西部では6層の上面と下面で行った。このため、当初の面を第2-1面とし、最下層の面を第2-2面とする。

近世の遺構 第1面でSD01を検出した。南北方向の溝で、西肩を確認し、東肩は調査区外である。確認幅は1.8m、深さは0.2mであった。埋土から近世前期の唐津焼・伊万里焼の供膳具などが出土し、宅地に近接した用水路と推定される。

平安時代前期の遺構 上記したように第2-1面と第2-2面に分けて遺構検出を行った。

第2-1面では南北溝SD20・29・33、東西溝SD32、土壇、柱穴などがある。

SD20・29・33は幅が25～30cm前後、深さは0.1m前後で浅く、排水のために掘られた一時的な溝である。

SK03は東西幅3.9m、南北幅1.4m以上で、深さは0.1mと浅い。埋土は黒褐色泥砂層で、平安時代前期の遺物が少量出土した。柱穴は円形や隅丸方形で、平安時代前期の遺物が出土したが、量は少ない。

第2-2面の遺構には柱穴・土壇などがあるが、土壇の多くは、SK44・48・49などのように不定形は土壇状遺構である。これらは道祖大路に接した窪地を、礫や砂泥を敷き、面を整地・安定させた遺構である。比較的多くの遺物が出土したが、整地時に混入した遺物が大半で、小破片となっている。

柱穴は円形のものが多く、径も0.2m前後のものが中心となる。内部に石を置くものもあるが数は少ない。

(3) 3区の層序と遺構

3区の基本層序をY=-24,412地点に代表させ上層から示すと、1～3層はアスファルト路面・整地層などの現代層、4層(10Y2/1黒色泥砂層)、5層(10YR2/3黒褐色砂泥層)、6層(10YR2/2黒褐色砂泥層)、7層(10YR2/3黒褐色砂泥層)、8層(2.5Y6/8明黄褐色砂泥層)で、地山層である。

5層上面で第1面の遺構、7層上面で第2面の遺構、8層上面で第3面の遺構を検出した。

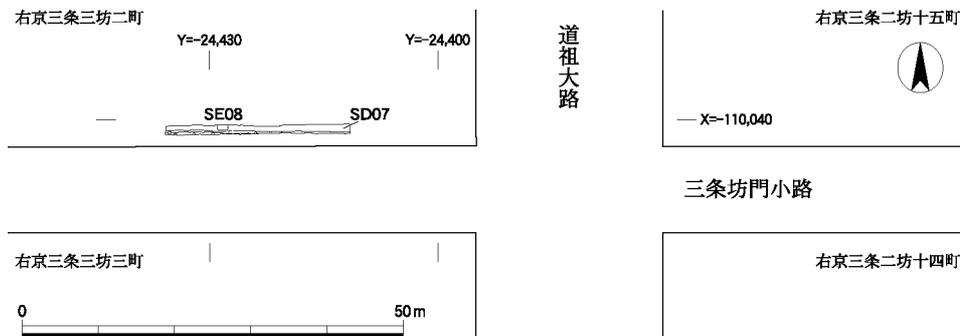


図4 三条坊門小路と3区の平安時代遺構(1:1,000)

近世の遺構 第1面で検出した遺構は、近代の攪乱が多い。この他に流路・土壙・小溝などを検出した。

流路SD03は調査区中央部で検出し、北東から南西方向に流れ、蛇行している。規模は幅約0.7～1.7m、深さ約0.7mで、断面U字形をしている。底部は流水で粘土層が挟られ、凹凸になる。

土壙は調査区全域に散在し、規模は一辺1m前後で、不定形のものが多い。溝は東西方向で幅・深さは一定せず、幅約0.2～0.5m、深さ約0.06～0.4mで、断面U字形である。耕作に関係する遺構と考えられる。

中世の遺構 第2面で検出した遺構には、土壙・溝などがある。

東西溝SD04～06は調査区東部にあり、幅約0.2～0.5m、深さ約0.05～0.1mで、断面U字形である。耕作に関係する溝と考えられる。

平安時代中期の遺構 第3面で検出した遺構には、溝・柱穴・井戸などがある。

SD07は調査区南側で肩を確認したが、調査区と同一方位でないために東側では北肩の傾斜面の検出にとどまった。規模は検出した現状で、幅が1.5m、深さ0.4m、埋土は10YR2/3黒褐色砂泥で、土器や炭を含む。平安時代の土師器・須恵器・黒色土器などがまとまって出土した。

SD07の南肩部の上面で、東西方向の柱穴を数基検出した。柱穴は径0.3～0.4mの円形で、間隔は約2.5m、柵列と推定できる。

SD07は、三条坊門小路北築地の中心座標値はX=-110,043.5m前後に推定されている約2.5m北で検出した。このことから築地内溝の可能性が考えられる(図4)。

方形縦板組の井戸SE08は、調査区の西部で検出した。掘形は北側が調査区外となるが、東西1.4mの方形で、深さは1.25mである。井戸枠は、内法一辺0.9m、残存長は下端から0.75mである。四隅に隅柱を立て、横棧を隅柱の榫穴に差し込み、縦板の側板を固定する構造である。

南東隅には径0.14mの八角形の隅柱が立つが、南西部の隅柱は抜き取られている(図版8-2)。横棧木は1段残存し、両端の片側を削り凸部を作り、隅柱の榫穴にはめ込む。棧木は長さ約0.86m・幅0.07m・厚さ0.05mである。縦板は幅約0.15m・厚さ0.01～0.02mで、南面では9枚が使われている。井戸枠内の埋土は、下層が7.5YR1.7/1黒色砂泥で、中層が7.5YR2/1黒色砂泥、上層が7.5YR1.7/1黒色砂泥で、土器類・瓦類が少量出土した。

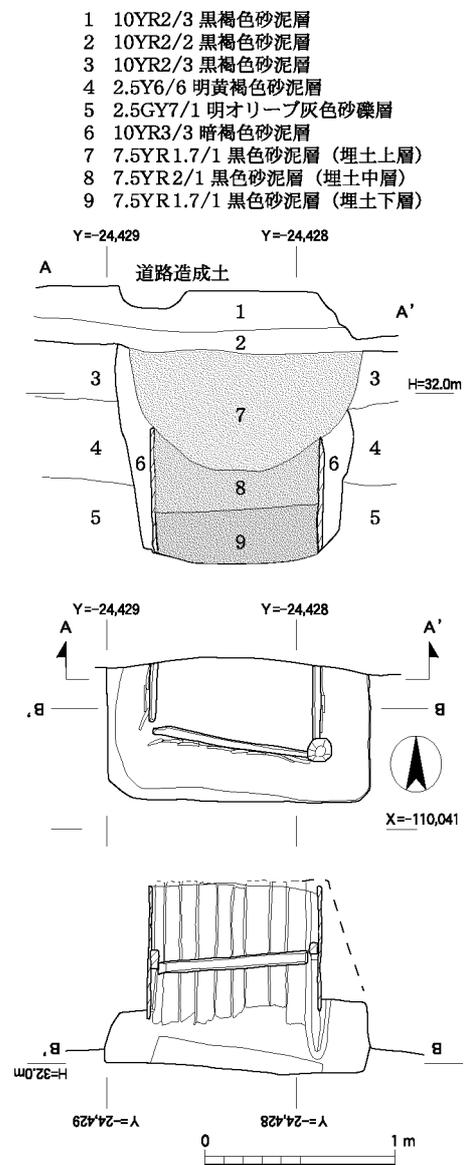


図5 SE08実測図(1:40)

4. 遺物

(1) 遺物の概要

出土した遺物には、土器類・瓦類・土製品・石製品・木製品などがある。大半は土器類で、他の遺物は少ない。その量は2・3区が多く、1区は少ない。

平安時代以前の土器類は、各調査区からごく少量出土した。いずれも細片で損傷が進んだ破片が多いので、混入したと考えている。

平安時代前期から中期の遺物は、各調査区から多量に出土し、特に1区土壌SK32、3区の溝SD07などからまとめて出土した。土器類が主体で、他に瓦類・土製品・石製品・木製品などが少量ある。

平安時代後期から鎌倉時代の遺物は、各調査区の土壌・溝・包含層などから出土し、土器類のみで、いずれも細片で全形のわかる個体はない。

室町時代の遺物は、主に3区の包含層や当該期の耕作に関係する小溝から出土した。土器類のみで、いずれも細片で全形のわかる個体はない。

3区から出土した土器類は器種ごとに破片数を数え、比率を算出した(表3)。

以下、各調査区ごとに概要を述べ、一括出土した遺物は遺構単位で詳細な説明を加える。

(2) 1区の出土遺物(図6、図版9)

出土した遺物には、平安時代の土師器椀・杯・皿・蓋・甕、須恵器杯・皿・壺・鉢・甕、灰釉陶器椀・皿・壺、緑釉陶器椀・皿、中国製磁器碗(越州窯)、製塩土器、瓦、砥石などがある。調査区東端部の土壌SK22・SK32からは平安時代の土器類がまとめて出土したが、他の遺構・包含層からの遺物は小破片で量も少ない。

SK32(図6-1~5) 土師器椀・皿・蓋・甕、須恵器杯・壺が出土した。

土師器椀1は、口縁部が底部から緩やかに内弯気味に開き、端部は角張り若干内側に肥厚する。底部・口縁部外面はヨコヘラケズリ、底部内面はナデ、口縁部内面はヨコナデである。土師器皿2は、口縁部が底部から緩やかに屈曲して開き、端部は丸く収める。底部・口縁部外面はヨコヘラケズリ、底部・口縁部内面と口縁部外面はヨコナデである。土師器蓋3は、天井部はふくらみ、口縁部は緩やかに下がり端部は垂下する。宝珠つまみは欠損している。天井部・口縁部内外面はヨコナデで、天井部・口縁部外面にやや粗いヘラミガキを4回施し、一周する。土師器甕4は、口縁部が体部から屈曲して外反し、端部は肥厚する。体部内外面はオサエで、内面は部分的にヨコハケ、外面はタテハケを施す。頸部・口縁部内外面はヨコナデで、内面に斜方向のハケを施す。

須恵器鉢5は底部と体部下半が残存している。底部には糸切り痕が残り、低い台形の高台が付く。体部は60度ほどの角度で立ち上がる。底部の器壁は薄い、体部は厚い。これらは 期新段

6) 階に属する。

SK22 (図 6 - 6 ~ 8) 土師器椀・杯・皿・甕、須恵器杯・皿・壺・鉢・甕、灰釉陶器椀・皿・壺、緑釉陶器椀が出土した。混入品の弥生土器破片もある。

土師器皿 6 は口縁部が底部から緩やかに屈曲して開き、端部は内側に肥厚する。底部外面・口縁部外面はヨコヘラケズリ、底部・口縁部内面と口縁端部外面はヨコナデである。他に図示していないが土師器甕がある。口縁部が体部から屈曲して外反し、端部は肥厚する。頸部・口縁部内外面はヨコナデである。

須恵器杯 7 は体部が底部から屈曲して外上方に開き、端部は丸く収める。台形の高台が付く。底部・口縁部内外面は回転ナデを施す。須恵器壺 8 は小型で、体部が平底から内湾して立ち上がる。体部内外面は回転ナデを施し、底部外面は回転糸切り痕が残る。 期新段階に属する。

(3) 2 区の出土遺物 (図 6、図版 9)

出土した遺物には、平安時代前期から中期の土師器皿・杯・小型蓋・高杯・甕、黒色土器椀・風字硯、須恵器杯・甕、灰釉陶器椀・皿・壺、緑釉陶器椀・皿、平安時代後期の白色土器、鎌倉時代の土師器皿、須恵器鉢、瓦質土器鍋・羽釜、近世初期の陶器椀・皿 (唐津・伊万里) などがある。調査区内の各遺構や包含層から出土したが、まとめて出土したものはなく、小破片が多い。図化できた個体を取り上げて説明を加える。

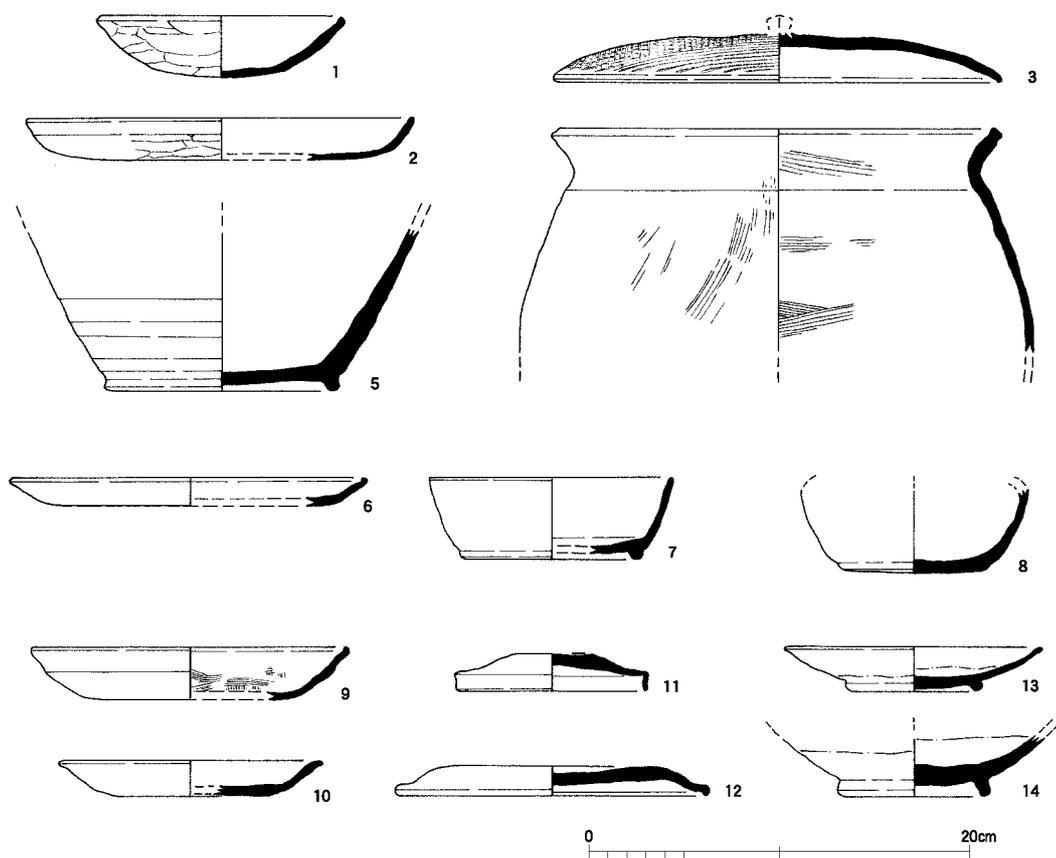


図 6 1・2区出土土器実測図 (1 : 4) 1区 : 1 ~ 8、2区 : 9 ~ 14

土師器杯9は、体部が底部から緩やかに屈曲して開き、口縁部はやや外反して、端部は立ち上がる。底部・体部外面はオサエ、底部・体部内面・口縁部内外面はヨコナデで、体部内面にハケを施す。SK21から出土した。

須恵器皿10は、口縁部が底部から緩やかに外反して開き、端部は外方に尖る。底部外面はナデ、底部内面・口縁部内外面は回転ナデで調整する。調査区東部の柱穴から出土した。須恵器蓋11はつまみが付かないもので、天井部は平坦、体部は屈曲して緩やかに外半し、口縁部は端部は垂下し、端部は丸く収める。天井部外面は回転系切りで、天井部内面・体部口縁部内外面は回転ナデである。包含層から出土した。須恵器蓋12は、天井部はやや凹み、口縁部は屈曲し端部は垂下する。天井部はナデで、天井部内面・口縁部内外面は回転ナデである。調査区東部柱穴から出土。

灰釉陶器皿13は、口縁部が底部から内弯気味に開き、端部はやや外反する。台形の高台を貼り付ける。底部外面は回転ケズリ、底部内面・口縁部内外面は回転ナデで調整する。内外面上半に施釉する。灰釉陶器椀14は、体部が底部から内弯気味に開き、三角形の高台を貼り付ける。底部外面は回転ケズリ、底部内面・体部内外面は回転ナデする。内面上半に施釉する。13・14は近世の溝SD01から出土した。

(4) 3区の出土遺物(図7、図版9・10)

出土した遺物には、平安時代前期から中期の土師器椀・杯・皿・高杯・甕、黒色土器椀、須恵器杯・皿・壺・甕・円面硯、灰釉陶器椀・皿・壺、緑釉陶器椀・皿、瓦、平安時代後期から鎌倉時代の土師器皿、瓦器椀(樟葉)、須恵器鉢(東播系)、陶器甕(備前・常滑)・擂鉢(備前)、室町時代の土師器皿・羽釜・鍋、陶器皿(瀬戸)・擂鉢(備前・丹波)・砥石、近世の陶器椀・皿などがある。平安時代の遺物が大半を占めるが、室町時代の遺物が包含層・溝からやや多く出土し、注目できる。

SD07(図7-15~42) 土師器椀・杯・皿・高杯・甕、黒色土器椀・甕、須恵器杯・皿・鉢・壺・甕・円面硯、灰釉陶器椀・皿・壺、緑釉陶器椀・皿、瓦が出土した。

土師器杯15~17は、体部は緩やかに内弯して開き、口縁部はやや外反して端部は若干内側に肥厚する。体部外面はナデ、体部・口縁部内外面はヨコナデである。土師器皿18~20は、体部が底部から緩やかに屈曲して開き、口縁部は外反して、端部は若干内側に肥厚する20と丸く収めるもの18・19がある。底部内外面・体部外面はナデ、体部・口縁部内外面はヨコナデである。

表3 3区出土遺物の器種別破片数

器種	土師器 供膳 形態	土師器 煮沸 形態	黒色土器	白色土器	瓦器	須恵器	灰釉陶器	山茶椀	緑釉陶器	輸入陶磁器	中世須恵器	焼締陶器	瀬戸・美濃	唐津	国産陶磁器	合計
破片数	5,408	860	178	1	36	1,283	300	9	316	33	14	28	15	4	92	8,576
%	63.0	10.0	2.1	0.0	0.4	15.0	3.5	0.1	3.7	0.4	0.2	0.3	0.2	0.0	1.1	100.0

土師器甕21は、口縁部が体部から屈曲して外反し、端部は内側に肥厚する。体部内外面はナデで、外面はタテハケを施す。頸部・口縁部内外面はヨコナデで、内面にヨコハケ、外面にタテハケを施す。土師器甕22は、体部が内弯し、口縁部は屈曲して外反し、端部が内側に肥厚する。体部内面はナデ、外面はオサエ、内面は部分的にヨコハケを施す。頸部と口縁部の内外面はヨコナデである。

須恵器杯23・24は体部が底部から屈曲して外上方に開き、24は台形の高台が付く。底部内面・

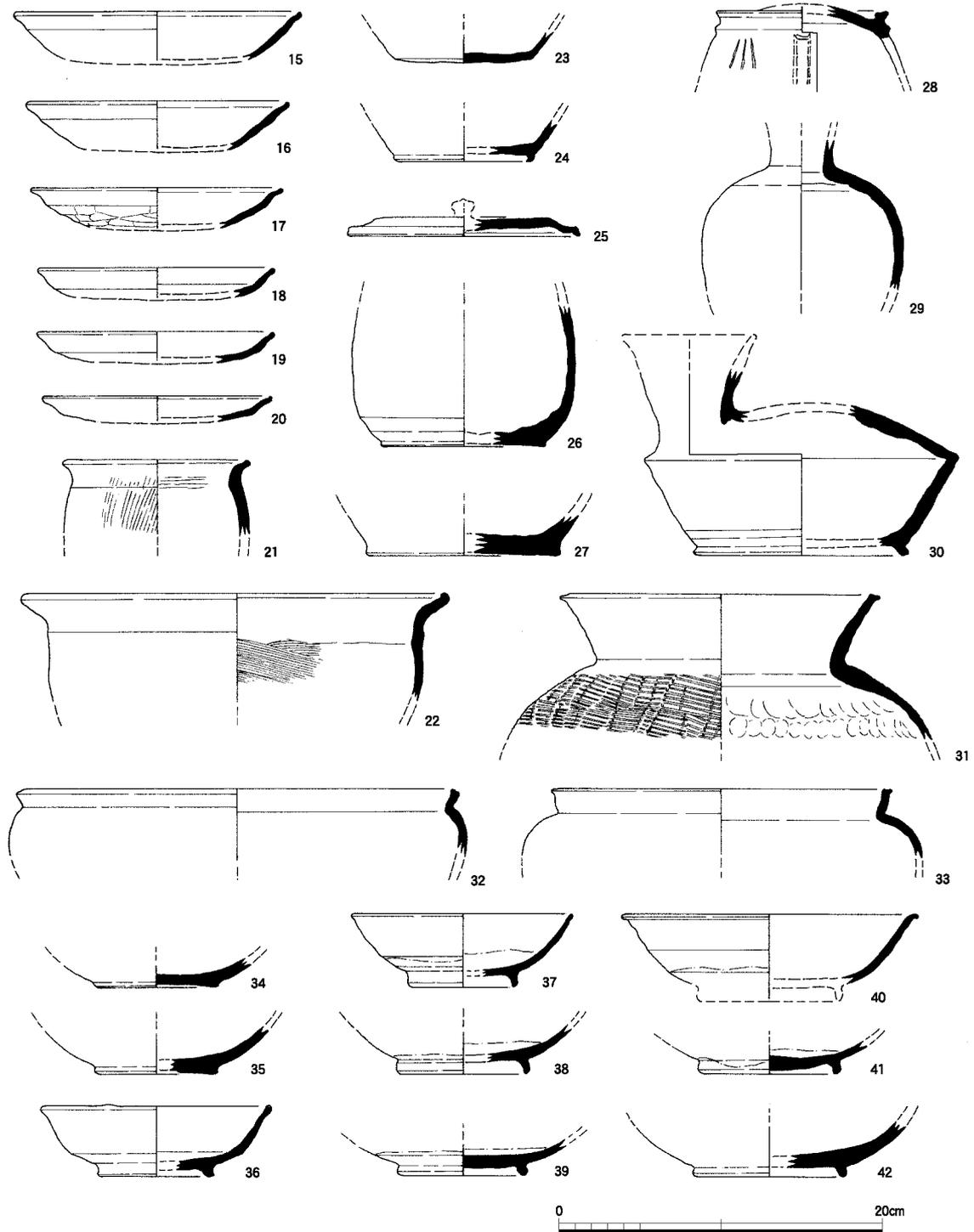


図7 3区SD07出土土器実測図(1:4)

体部内外面は回転ナデを施す。底部外面はナデである。須恵器蓋25は、天井部は平坦で、口縁部は屈曲し端部は垂下する。天井部外面はナデで、天井部内面・口縁部内外面は回転ナデである。須恵器壺26は、体部が平底から内湾して立ち上がる。底部内面・体部内外面は回転ナデを施し、27は体部外面下位のみ回転ケズリを施す。底部外面に回転系切り痕が残る。須恵器壺29は、体部が卵形で肩はやや張り、口縁部は屈曲して立ち上がる。体部・口縁部内外面は回転ナデを施す。須恵器平瓶30は、体部が平底から直線的に開き、天井部はふくらむ。天井部の一方に口縁部が取り付く。底部に外側に張る高台が付く。体部・天井部内外面は回転ナデを施し、体部外面下位のみ回転ケズリを施す。口縁部は天井部を円形にくりぬき、差込み接合する。内外面回転ナデである。須恵器甕31は、口縁部が体部から屈曲して外反し、端部は外側に拡張する。体部内面は円形当て具痕跡で、外面は平行叩きを施す。頸部・口縁部内外面は回転ナデを施す。須恵器鉢32は、体部が内湾し肩がやや張る。口縁部は屈曲して立ち上がり、端部は外側に拡張する。体部・頸部・口縁部内外面はヨコナデである。須恵器硯28は、天井部はややふくらみ、外周に凸帯が廻る。脚部は外方に開き、方形透かし穴とヘラ描き沈線を四方に施す。天井部内面ナデ、天井部外面・凸帯脚部内外面は回転ナデである。

緑釉陶器椀34は円盤高台で、体部は内湾気味に開く。35は底部が蛇ノ目高台である。共に底部外面回転ケズリ、底部内面・体部内外面は回転ナデで、体部外面下位のみ回転ケズリを施す。内外面共にヘラミガキを施す。全面にハケで施釉する。山城産である。緑釉陶器椀36は、平底で体部は内湾気味に開き、口縁部は外反し端部は丸く収め、四方に輪花を付ける。体部外面に稜がある。底部外面は回転ケズリ、底部内面・体部・口縁部内外面は回転ナデで、体部外面下位のみ回転ケズリを施す。内外面共にヘラミガキ調整し、全面にハケで施釉する。山城産である。

灰釉陶器椀37～41は、平底で体部は内湾気味に開き、口縁部は外反し端部は外側に尖る。底部に高台が付き、37・38は三角形、39・41は外に張る。底部外面は回転ケズリ、底部内面・体部内外面は回転ナデで、体部外面下位のみ回転ケズリを施す。口縁部・体部内外面に施釉する。

表4 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
弥生時代～古墳時代	弥生土器・土師器	7箱	土師器14点、須恵器17点、灰釉陶器7点、緑釉陶器3点、白色土器1点	5箱	0箱
平安時代前期～中期	土師器・須恵器・黒色土器・灰釉陶器・緑釉陶器・越州窯青磁、瓦、井戸部材・曲物				
平安時代後期～鎌倉時代	土師器・瓦器・須恵器・陶器・磁器	14箱	土師器7点、瓦器2点、陶器4点、須恵器2点、輸入陶磁器3点	14箱	0箱
室町時代	土師器・陶器・磁器、砥石				
近世以降	陶器・磁器				
計		21箱	60点(2箱)	19箱	0箱

白色土器42は、底部の破片で、底部には台形のやや高い6mmの高台が付く。底部内面にはミガキ痕があるが、外面調整は軟質で器面が荒れているために不明である。期新段階に属する。

鎌倉時代から室町時代の土器（図版10 - 43～60）第2面の耕作溝や包含層から各種の土器が出土している。

土師器には皿43～49がある。43・44は口径が14cm前後になる中皿の口縁部破片で、44は底部からわずかに外反しながら斜め上方に立ち上がるが、43はほぼ直線的に端部に至る。45～47は口径10cm前後の小皿、46は端部にススが全面に付着し、灯明皿として使われたことがわかる。48は口径6.6cm、器高1.7cmのへそ皿で、端部は素直に処理している。49は体部の中位で外反する小皿で、一部に灯明皿としての使用痕跡がある。

50は瓦器の羽釜で突出の少ない薄い鍔がめぐる。51は端部が三角形になる鍋の口縁部小破片である。椀も数点出土しているが、図化できるものはない。

52・53は、灰釉が施された小皿とおろし皿で、53の底部には糸切り痕がある。瀬戸窯の製品である。

54は常滑焼の甕で、55は備前焼の播鉢である。共に口縁部の小破片で、前者は13世紀代、後者は14世紀に生産年代をもとめることができる。

56・57は、須恵器捏鉢の口縁部破片で、重ね焼きの痕跡がある。東播系の製品である。

58～60は中国陶磁器で、龍泉窯青磁碗と白磁皿が出土している。58・59は青磁碗で共に無文、前者は釉が厚く、暗緑色の色調から天竜寺系の製品である。60は端部が口禿になる皿、口径は11.2cm、器高3cmである。残存部には薄い灰色の釉が掛かる。

常滑焼甕や中世須恵器鉢は13世紀代に生産されたものであるが、その他は14・15世紀の遺物である。15世紀の遺物が多数を占める。

5. ま と め

今回の調査は、調査面積は狭いものの、平安時代前期から近代にわたる多数の遺構を検出した。ここでは、周辺の調査成果なども含め、各時期ごとに検討を行い、調査のまとめとしたい（表1・5、図3・8参照）。

（1）平安時代前期から中期

平安京造営以前の旧地形 今回の調査では、平安時代以前の遺構は検出していないが、周辺での発掘調査や広域立会調査によって、当該期の状況が次第に明らかになっている。その成果によると、調査地周辺の旧地形は、北から南西に緩やかに下がる地形を呈している⁷⁾。三条三坊三町・五町・十町・十二町などの調査では、古墳時代以降の湿地や川跡を検出し、当地域が湿潤な低湿地と低位段丘の乾燥した地形が複雑に入り組んだ地域であることを示している。これらの湿地や旧河川跡などの低地は、平安時代には整地され、その後に条坊関連遺構や宅地内の諸施設が施

工・整備されている。

条坊関連遺構 今回の調査地は、平安京右京三条二坊十五町・三条三坊二町にあっている。当調査では調査区が南北に狭い関係で、直接的な条坊関連遺構を検出することはできなかったが、3区では東西溝SD07とその南辺で東西柵列を検出した。この溝は、検出の位置関係やほぼ東西方向であることから、三条坊門小路北築地内溝と推定したが、規模など全容が判らないので想定にとどめておく。この溝からは平安時代前期後半、9世紀後葉の土師器・須恵器・施釉陶器がまとまって出土し、この時点で埋没したことがわかる。

調査地周辺では、三条二坊十六町（表1-10・11）で野寺小路西側溝・押小路北側溝、三条二坊十四町（表1-7・8）で野寺小路両側溝・道祖大路東側溝・三条坊門小路北側溝、三条三坊四町（表1-13）で道祖大路西築地内溝、三条三坊五町（表1-14）で姉小路南側溝を検出した。これらの条坊関連の遺構は、ほぼ計画通りに造られており、統一的に造られた状況が想定できるが、当地域にいつの時点で条坊が施工されたかについては不明な点が多い。

宅地内の状況 当調査地では、平安時代前期前半（9世紀中頃）の土壌・柱穴などの遺構を検出し、遺物もある程度出土している。柱穴の検出が少なく現在のところ建物の復元はできないが、当該期は町域南辺も居住地となっていたことがわかる。1区北側の三条二坊十五町（表1-9）南半部で掘立柱建物・井戸・溝を検出した。1・2区南側の三条二坊十四町（表1-7・8）では、北東部・北西隅で掘立柱建物・柵・土壌・井戸等を検出し、1/8町あるいは1/4町程度の宅地があったことが想定されている。3区南側の三条三坊三町北西部（表1-12）では、3期にわたる比較的規模の大きい掘立柱建物・柵・井戸・溝などが検出されている。

3区では三条三坊二町南辺で井戸を検出した。調査地東部の三条二坊十六町では、3基の井戸と2つの泉が発掘されているが、共に町の四隅か道路に面した東西の中央に配置され、町を細分して班給した宅地の中央には存在しない。同様の状況は三条二坊十五町でもみられる。宅地の設定地内に井戸が固有に付属する配置を基本とすると、これは原則から外れた配置をしたとも考えられ、当地域の固有の理由が想定できよう。

これらの宅地内に建物等が建てられ始めた時期は不明だが、周辺の土壌・溝などから出土した土器などから考えると9世紀中頃からと推定でき、宅地の利用が平安京造営当初ではなく、若干遅れて始まることを示唆していよう。また、本調査地および周辺の調査地では、平安時代中期前半（10世紀）段階になると遺構の数が急激に減少し、遺物の出土量もかなり減少している。このことから当該期には、建物等が廃絶したり居住域が狭くなったことが判る。

（2）平安時代後期から鎌倉時代

大規模な河川 当調査区周辺では、条坊道路路面内などで大規模な南北河川を検出している。2区北側と南側の三条二坊十四町北西隅の立会調査⁸⁾では道祖大路内の河川、1区北側の三条二坊十五・十六町南側（表1-10）と三条二坊十四町北東部（表1-7）では、野寺小路内の河川を検出している。さらに、三条二坊八町の中央部（表1-4）では大規模な河川、三条二坊十町（表1

- 2) に接した西側では西堀川を検出している。河川の両岸が検出された三条二坊十四町 (表 1 - 8) 北東部の野寺川 (SD 5) では、東西幅 9 m ・ 深さ約 2 m の規模であったことが明らかとなった。河川の存続時期は、道祖川が平安時代前期の 9 世紀後半から鎌倉時代、野寺川が平安時代後期から室町時代、三条二坊八町の中央河川が平安時代、西堀川が平安時代前期から後期である。

平安京造営当初から存在した本格的な河川は堀川だけであるが、上記したようにその西側に位置する野寺小路や道祖大路も後に道路中央部が路面敷きから河川に変化したことは、都城内で排水に苦慮したことが窺える。しかし、河川は道路敷き以外に広がることなく、管理されていたことが指摘されている⁹⁾。大規模河川の新たなる設定については、多雨などの自然条件や、京内外の宅地や山野の開発で流量が増加したことが推定されるが、一義的には右京で宅地開発が進んだ結果と考えられる。

道路と宅地 調査地周辺で平安時代後期の遺構を検索すると、三条三坊三町 (表 1 - 12) では SB01 の総柱建物、十町では SB33 ・ 34 ・ 37 などが候補になる。これらの遺構は報告書では平安時代前期と推定しているが、方位が東に振ること、柱穴が隅丸方形で小規模なことなどの状況から、前期の建物群よりは後出するとも判断され、三条二坊十六町 (表 1 - 11) で検出された平安時代後期の建物を基本資料とすると、平安時代後期としても問題はないと考えられる。

右京の一部では、平安時代前期における町内を分割した宅地配置が、平安時代後期から鎌倉時代前期の 12 ~ 13 世紀になると崩れ、道路に沿う宅地が成立し、街村の景観になったことが上記の調査成果から判る。

(3) 室町時代

室町時代の遺構 主として 3 区に存在した。包含層や耕作に伴う小溝などであるが、当該期の遺構は北側の三条二坊十六町 (表 1 - 11) の調査でも検出されており、面的に広がっていたことが判る。3 区の調査地内では、西側に包含層が下がり、西側近くに谷状の地形があることが予想された。付近の地形図をみると西 100m に、昭和初期まで流れていた紙屋川 (天神川) の旧流路痕跡が、北東から南西へ斜行する道路として残存していることがわかる (図 1 ・ 8)。この流路の成立時期は不明であるが、3 区の遺構や包含層の状況から判断すると、室町時代には近隣を流れていたことが予想される。出土した遺物は室町時代の 15 世紀後半代を中心とするもので、土師器を主体に各種の土器が一定量出土している。

このような当該期の遺物の散布は、今回調査した西ノ京東中合町 ・ 西中合町だけではなく、右京のさらに広い範囲に展開している¹⁰⁾。ここでは、都市的な宅地空間に存在する建物や井戸 ・ 土壌などの明確な遺構が存在しないことから、一般的な宅地としての空間でない可能性が高い。当地は都城の成立期は宅地であったことは遺構から説明できるが、右京から左京へ宅地の集中する平安時代中期後半から後期の過程で、一部は耕作地に変化した場所であることが売地券から実証できる。このように考えてくると、この遺物が当該期の特別な社会背景から出土していることが予想される。この実態は、厳密な検証が必要であるが、応仁の乱に伴う左京の荒廃と関係するので

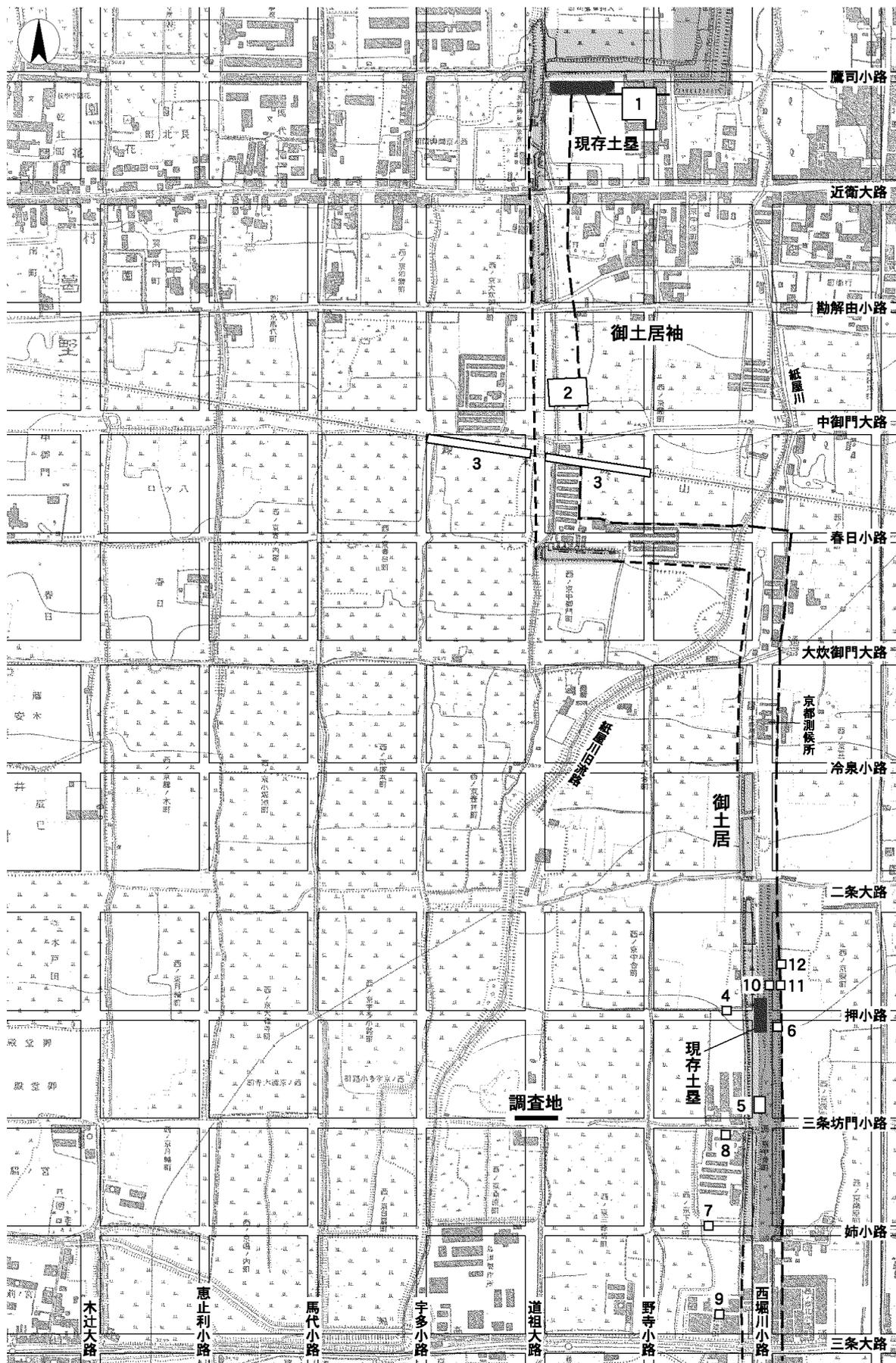


図8 御土居の復元と既往の調査地点 (1 : 7,000)
 1922年刊行の都市計画図 1 : 3,000 「聚楽廻」「西院」を調製

はないかと予想されるが、乱などの争乱による武士のキャンプ地として使用された可能性や、都市民の一時避難的な簡易な建物が当地に広がっていたことなどが想定できようか。しかし、出土遺物には多くの中国陶磁器を含む地点などもあり、今後の課題である。

(4) 戦国時代末期

京都は天正19年(1591)に土居と堀で囲い込まれ、聚楽第を城とする城郭都市になった。惣構の御土居は西ノ京を分断し、以後の景観を大きく変えた。表5と図8に示したように、周辺地域で御土居に関係した調査事例は数箇所あるが、直接関係する調査は2が唯一である。この調査地点は西土居通に近接することから、堀や土塁の検出が予想された。検出した遺構には、平安時代の幅8m前後の西堀川、その両側に造られた路面、西側の道路側溝などで、御土居に関係した遺構は検出できなかった。盛土された土塁は削平されると検出が困難であることを示している。

紙屋川と御土居の袖 平安京の条坊を都市計画図に重ねると、西堀川小路と紙屋川は、北京極外から中御門大路までの約1kmが重なり、その南で西に斜行する。御土居との関係でも同じことがいえ、京外では鷹ヶ峰の北西角まで繋がる。

このように御土居は鷹司小路まで紙屋川と並行して走るが、ここから南では条坊の2町分西に

表5 御土居関係調査一覧表

番号	調査地区	略記号	種別	所在地	調査期間	調査概要	文献
1	一条二坊十五町	87HK-IP	発掘	中京区西ノ京中保町1-4	1987.10.8～11.30	御土居堀南肩の一部を検出。	昭和62年度京都市埋蔵文化財調査概要 42p
2	十三町	99HK-JE1	発掘	中京区西ノ京西門町55-1	1999.11.1～2000.3.25	御土塁基底部と堀の東肩を検出。	平成11年度京都市埋蔵文化財調査概要 26～36p
3	十六町	97HK-UX001	発掘	中京区西ノ京西門町	1997.9.8～1998.2.13	御土居盛土と内側の排水溝が検出される。	平成9年度京都市埋蔵文化財調査概要 3～32p
4	三条二坊九町	91-No.3	試掘	中京区西ノ京東中台町66	1992.2.3	GL-1.16mで平安中期の包含層。GL-1.3mで地山。	京都市内遺跡試掘調査概報平成4年度 41p
5	西堀川小路	82HK-RD	発掘	中京区西ノ京原町64	1982.6.17～7.10	西堀川小路の堀川、路面2面、西側溝等を検出。	昭和57年度京都市埋蔵文化財調査概要 39p
6	七町	87BB-HR41	立会	中京区西ノ京原町55-2	1987.6.1	GL-0.9mにて平安前期～中期の湿地堆積。	京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度 72p
7	十一町	00BB-HR58	立会	中京区西ノ京新建町1	2000.6.1	姉小路北側溝、路面を検出。	京都市内遺跡立会調査概報平成12年度 13・39p
8	十一町	94-No.47	試掘	中京区西ノ京下合町29-1	1994.4.14	GL-0.9mで平安の溝状遺構・柱穴等を検出。	京都市内遺跡試掘調査概報平成6年度 15・32p
9	十二町	98BB-HR8	立会	中京区西ノ京新建町5-21	1998.4.6～4.7	GL-2.02m以下、平安中期の池状堆積。	京都市内遺跡立会調査概報平成10年度 54p
10	八町	92BB-HR41	立会	中京区西ノ京原町34	1992.4.28～5.6	GL-1.02mにて平安の包含層。	京都市内遺跡立会調査概報平成4年度 56p
11	八町	97BB-HR307	立会	中京区西ノ京原町35	1997.10.23～10.24	GL-0.35mで東西溝2。-0.68m以下で平安中期以降の湿地。	京都市内遺跡立会調査概報平成9年度 77p
12	八町	85BB-HR147	立会	中京区西ノ京原町28-2	1985.11.15	GL-0.19mにて室町の包含層、-0.78で平安中期の包含層。	京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和60年度 61p

張り出し、南に3町分続き、また東に折れる。この部分は、御土居の袖といわれ、条坊で示せば、東西では西堀川小路から道祖大路まで、南北では勘解由小路から春日小路までで、東西2町、南北3町の合計6町がこの範囲となっている。条坊の衰退から時を経ているが、その痕跡は耕作地の水路や畦畔として存続していたと推定され、それを利用して袖を設定したことが想定できる。この部分に注目した多くの研究者がこの問題に言及している。その代表的なものを以下にあげる。

1. 豊臣政権に関係した戦国時代の寺院、弘誓寺を土居内に取り込むため。
2. 付近の地下水を堀に取り込むため。
3. 小泉庄の範囲を外した。

また、袖の問題には直接ふれていないが、絵図類の分析から、豊臣期には紙屋川が袖内を流れていなく、一条通の上で堰き止められ、袖の西側を迂回して流されていた、との説もある。

以上、主な説の結論だけを紹介してきたが、6町内の機能に関する考察が中心で、紙屋川（天神川）との関係を視野に入れた考察がなされていない。

この部分が持つ地理的な関係は、紙屋川がここから南流をやめて南東に流れることである。これは現地形にいくつもの旧流路の痕跡があり、何回もこの部分で洪水が起こり流路が変更されたため、昭和20年代には結局大きく南西に流れを変え、御室川に合流させたのである。御土居の



写真2 西ノ京原町に現存する御土居（南東から）



写真3 西ノ京原町に現存する御土居（東から）市五郎神社の鳥居が右に見える

造営時期にもこの部分で南西への流路変換点があったことが予想される。

近代の景観を記述した資料⁴⁾には、「紙屋川は西院領内では天井川となり殊に三条から松原までは相当高く土手を積み上げ、西側は棕の大木や竹本が堤防保全のためにはえていた」と、天井川化した紙屋川の旧状を伝えて、洪水の発生にもふれている。

御土居内の西ノ京から南の明治期の景観をみると、一条通から九条までの千本通（朱雀大路）以西には広範に水田が広がっている。当該地域が耕作地であったことは、近世初期の絵図である「京都図屏風」などの史料でも確認できるが、この部分は戦国期にも洛中の食糧生産地として機能していた。したがって、耕地に供給する水路が不可分であったのである。この機能を担ったのが東堀川や紙屋川と考えられ、このために御土居内に河川を引き込んだと推定できる。ただ、現状では紙屋川からの用水は御

土居袖の周囲では存在しないので、周辺での調査を待つて後考したい。

西辺の御土居は、北野神社以南で残存するのは2箇所である。しかし、大正期までは大半がその規模や構造を明示していた。大正11年の都市計画図で、土塁を破壊している構造物をみると、京都測候所やその範囲に収まる住宅地がある。水田などの耕作地を維持する構造が読みとられ、反面、御土居が最適な宅地空間として選択的に選ばれたことがわかる。¹⁴⁾

(5) 近代の景観、周辺地域の調査課題

これまで述べてきたような変遷を辿り、近世になると山ノ内村・西院村のように領域型の村が成立してくる。西院村をみると、四条通北の字乾條と南の坤條が当初の範囲で、次に東に展開し良條と巽條が付け加わったことが理解される。最終的には、御土居に西接する東側の高山寺までが、出在家として領域に組み込まれたことが町名から類推される。

右京域における大半の明治初期における景観は、西院村などの集村が点在し、その周囲には耕作地が広がる。この景観の成立課程は十分解明されていないが、桂川を超えた向日市や長岡京市域では15世紀には集村化が行われ、近世村落に引き継がれたことがわかる。当地とその周辺における15世紀の遺物の広がりを見ると、この地域が単純に耕作地としての経過をたどってきただけでないことがわかり、多様で変化する社会構造の中で歴史が成立してきたのである。

これまで平安時代から近世まで、周辺での調査成果をまとめてきたが、課題がいくつか残り、今後の調査で課題を解決することが求められている。以下その項目を時代順に並べ、今時の調査に関係した概報の考察を終えたい。

1. 『池亭記』などの文献を根拠に、右京の衰退が10世紀から始まると論考されているが、その原因についての専論はない。右京三条二坊十六町での平安時代後期の街路に沿う建物の検出などからその推移を考えると、直線的な右京の後退ではなく、条坊の町内に配分された宅地は多様な過程を経て、耕地化への道を歩んだことが類推される。

2. 室町時代の15世紀段階では、当該期の遺物が遺構が存在しない状態で、西ノ京やその周囲に広がっている。この現象の理解については、応仁の乱などの戦乱に伴う社会現象の一端として考えたが、当然存在した遺構との関係で、論議を深めなければならないと考える。

3. 御土居は都市京都を囲う惣構として構築されたが、西南部には多くの耕作地も含めている。まだ、その内外での遺跡や遺構の在り方については、比較対称は行われていない。洛外と洛外が具体化した段階での、比較検討が必要と考える。

註

- 1) 地下鉄東西線の二条駅から西への延長については、二条駅周囲で実施した拠点整備事業と、路線建設のための道路拡幅に係る調査が行われてきた。前者には、「平安京右京三条一坊2」(『平成10年度京都市埋蔵文化財調査概要』2000年)など、後者には御池通の拡幅に伴う、『平安京右京三条一坊十・十五町跡』(京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2001-2 2002年)などの調査がある。

- 2) 『京都市遺跡地図台帳』平成8年 京都市文化市民局 1996年
- 3) 都市計画図 大正11年版「聚楽廻」「西院」京都市 1922年
- 4) 中澤嘉六「西院の川」『西院の歴史』1983年 144・145p、『京都市の地名』平凡社 1979年 1022p
- 5) 市五郎神社は、明治23年に御土居の西側一角に創建された。その後、西京商業高校の建設に伴い、大正13年には御土居を破壊する土取りが順次行われたが、神社の付近では事故が相次いで、工事は中止され、神社も残った。昭和5年に史跡指定される。中村武生「御土居堀ものがたり」45 京都新聞 2002年5月9日
- 6) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』3号 京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 7) 挿図70に周辺地域のコンター図が掲載されている。平尾政幸「考察 平安時代の遺構」『平安京右京三条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第10冊 1990年 126p
- 8) 『平安京右京三条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第10冊 1990年 7pの表1と37・38pで、立会調査で検出した流路を報告している。
- 9) 山田邦和「中世都市京都の成立」『都市の構造と展開』奈良国立文化財研究所 1998年 279～281p
- 10) 代表例を1箇所あげておく。『平安京右京六条四坊・五条大路』京都文化博物館調査研究報告 第8集 1991年。これに関して辻裕司は、室町時代後半期になると遺構が検出できなくなるが、遺物の出土地点が増える、としているが、その原因については記述していない。「遺跡から見た室町期京都の構成」『日本史研究』第436号 1998年 42p
- 11) 1・2は、中村武生「豊臣期京都惣構の復元的考察」(日本史研究 420号 1997年 19・20p)が詳しく紹介している。
3は杉山信三が、御土居の設定位置と小泉庄について、「五条二坊二町(中略)このあたり小泉庄を通ることを御土居は避けているかのようなのである」また、「それら外した地が或いは小泉庄を引き継ぐ自治体制下にあったのではないかと考察している。「平安京右京の湿地について」『古代文化』40巻9号 1988年 17p
- 12) 中村武生「豊臣期京都惣構の復元的考察」(日本史研究 420号 1997年 19・20p)
- 13) 京都の惣構内、洛中でも郊外の道路は直線で示され、町の道路とは区別して描かれている。百瀬正恒「聚楽第の築城と都市の発展」『豊臣秀吉と京都 聚楽第・御土居と伏見城』文理閣 2001年 148p
- 14) 同様の開発が北区鷹ヶ峰でも行なわれた。中村武生 他「京都市北部・鷹ヶ峰地域の景観変遷と集落形成史(その2)」『仏教大学文学部論集』第86号 2002年 口絵6～8

付記

本概報の図3、表1・5などのデータは、『平安京右京三条二坊十五・十六町』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第21冊 2002年、を参照した。

圖 版

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょううきょうさんじょうにぼうじゅうごちょう・さんぼうにちょうあと							
書名	平安京右京三条二坊十五町・三坊二町跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報							
シリーズ番号	2001-6							
編著者名	百瀬正恒・上村和直							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265-1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2002年10月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょう 平安京 うきょうさんじょう 右京三条 にぼうじゅうごちょう・ 二坊十五町・ さんぼうにちょう 三坊二町	きょうとしうきょうく 京都市右京区 にしきょう 西ノ京 ひがしなかあいちょう・ 東中合町・ にしなかあいちょう 西中合町 (おいけどおりない) (御池通内)	26100		35度 00分 28秒	135度 43分 57秒	2001年10月 22日～2001 年11月29日	162.5m ²	地下鉄 駅舎建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京 右京三条 二坊十五町・ 三坊二町	都城	平安時代前期 室町時代 近世	土壇・井戸・柱穴・ 溝	土師器、黒色土器、須 恵器、緑釉陶器、灰釉 陶器、製塩土器、円面 硯・猿面硯・風字硯、 輸入陶磁器：白磁Ⅰ類 ・白磁Ⅳ・Ⅴ類、越州 窯青磁・龍泉窯青磁、 軒丸瓦・丸瓦・平瓦、 埴埴				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2001 - 6

平安京右京三条二坊十五町・三坊二町跡

発行日 2002年10月31日

編集行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 075-256-0961